

第5章 戸を閉めることのアフォーダンス

佐々木 実花

1. 調査の概要

2004年8月4日(水)、A県T市の社会就労センターセルフZ園(ここでは施設名、人名などは全て仮名表記する)において調査を行った。午前8時から午後5時半過ぎにかけて、作業所や寮等での生活の様子をビデオで撮影した。

2. 鈴木さん(仮名)について

病名は二分脊椎。車椅子で生活している。毎日少しずつだが、義足を装着し、杖をつきながら歩行の訓練をしている。軽作業場での仕事を担当しており、タイヤの部品を扱う仕事や、少女漫画雑誌の付録の袋詰め作業などを行っている。

3. 注目部分

戸が人にどのようなメッセージを送信し、人がそのメッセージをどのように受け止めているのかに興味があったので、戸の出入りに場面を絞って分析していくことにした。様々な戸の出入りの場면을観察したが、その中で特に興味深かったのは鈴木さんの自分の部屋への出入りの場面だ。Z園(仮名)では多くの戸が開け放たれており、自分が開けた戸でも閉めないことが多い。鈴木さんも開け放したまま通り過ぎることが多かったが、閉める場면을観察することが出来た。ほとんどが開け放したままなのに、一部で閉める時があるということから、閉めることには何か特別な意味があるのではないか、と思い考察してみることにした。

3-1 開けるか閉めるかの判断

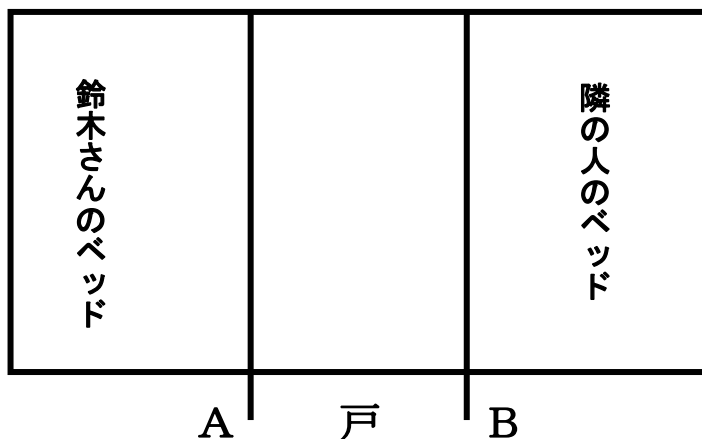
鈴木さんは、自分の部屋の内側から外側へ出る際に①開け放したままにする時と②自分で閉める時とがあった。この違いがどうして起こるのかを考えてみたい。

3-2 仮説 閉め方の違い

鈴木さんが寝泊まりしているのは2人部屋で、入って左が鈴木さんのベッド、右が他の人のベッドになっている。(図1参照)ここでの仮説は戸を閉めることが前提で、それが神経質になされるか否かを問題としている。

私がAの位置に立っている場合、鈴木さんは戸を閉めることに関してそれ程神経質になっていないようだ。私がAの位置に立っている時、鈴木さんに焦点を当てて撮影する限り、部屋の中までがビデオに写ってしまうことはないからだと考えられる。厳密に言うと、この角度から鈴木さんが使っているベッドまでが写ってしまうことはない。写るとすればそれは右側なので(他の人が使っているベッド側)、そこが写ろうが写るまいが、それは鈴木

さんにとって重要な問題ではない。だから私が A の位置に立っている時、鈴木さんは精神的余裕を持って戸を閉めたと考えられる。それに対して私が B の位置に立っている時、鈴木さんのベッドが置いてある左側が写ってしまう。だから鈴木さんは、出来るだけ早く戸を閉めたいという思いから、Aの時と比較すると精神的に緊迫した状態で戸を閉めたのではないか。



【図1：鈴木さんの部屋の構造】

3-3 ビデオに基づく分析

3-3① 撮影者の視線を気にしている場面

上で述べた仮説が成り立つには、まず、鈴木さんが撮影者である私を意識している場面が観察されている必要がある。画像1-1～1-3は、鈴木さんが部屋に入る直前の一連の動作を示している。3枚を見比べてみると、画像1-2でわずかに後ろを振り返っていることが観察できる。これは撮影者を意識していることを表す行動だと考えられる。



【画像1-1】

部屋に入る場面

(2004.8.4. AM6:35:23 カメラ)



【画像1-2】

わずかに後ろを振り返っている

(2004.8.4. AM6:35:24 カメラ)]



【画像1-3】

(2004.8.4. AM6:35:26 カメラ)

また、画像2-1～2-4は、鈴木さんが食堂の戸を開ける場面だ。画像2-2で観察できるように、戸を開けた時に後ろを振り返るしぐさが観察できる。車いすで戸を開けると、体が後ろを振り返るような角度になる。そのため画像2-2だけでは、後ろを振り向こうとして振り向いたのではないとも取れる。しかし、画像2-3を見ると、戸を開け終わった後でも後ろを振り向いている様子が観察出来る。このことから、やはり撮影者を意識して視線を向けたのだと考えられる。



【画像2-1】

戸を開けようとしている

(2004.8.4. AM6:33:53 カメラ)



【画像 2-2】

戸を開けてしまった後、後ろを振り返っている

(2004.8.4. AM6:33:58 カメラ)



【画像 2-3 : 戸を開ける場面③

わずかに振り向いている。】

(2004.8.4. AM6:34:00 カメラ)



【画像 2-4】

(2004.8.4. AM6:34:02 カメラ)

また、画像 3-1～3-4 では、大きく後ろを振り返る場面が観察できる。これは後方に関心を抱いていることを示すデータだと言えよう。



【画像 3 - 1】

(2004.8.4. AM7 : 32 : 50)



【画像 3 - 2】

後ろを振り返った

(2004.8.4. AM7 : 32 : 51)



【画像 3 - 3】

大きく振り返った

(2004.8.4. AM7 : 32 : 52)



【画像 3 - 4】

(2004.8.4. AM7 : 32 : 53)

また、画像 4 - 1 ~ 4 - 6 は部屋から出て来る場面だが、この時鈴木さんの視線は一貫して撮影者の方に向けられている。これは、撮影者の視線がどこに向けられているのか監

視する視線だと考えられる。撮影者がどこを見ているのか監視することは、撮影対象を探ることと関係している。自分にとってあまり撮影されたくない場所(ここでは自分のベッド周り)に撮影の焦点が当てられているのであれば、それを対象から除外するよう撮影拒否の行動をとることが出来る。



3-3② 戸を閉めるのを失敗する場面 (撮影者はBの位置に立つ)

部屋を出ながら戸を閉める場面が画像 5 - 3 ~ 5 - 1 1 で観察できる。この場面で撮影者はBの位置 (図1 参照) に立っている。画像 5 - 7 で観察できるのは、戸を閉めようと取っ手を掴もうとするのだが、手が上手く取っ手に引っかからなかった場面である。鈴木さんは自分の部屋を撮影されるのを拒絶したいので、早く戸を閉めようと試みたのだが、結果的に焦りに繋がり失敗したと考えられる。撮影者が A の位置 (図1 参照) に立ってい

る時にはそのような焦りを生み出す要因は存在しない。確かに A の位置に立っている時にはこのような状況を観察することは出来なかった。



【画像 5 - 1】

入る時は閉まっていた。
自分で開けて入り、出る
時に閉める。

(2004.8.4 AM6:48:46)



【画像 5 - 2】

(2004.8.4 AM6:48:47)



【画像 5 - 3】

出て来るところ

(2004.8.4 AM6:51:59)



【画像5-4】

後ろ手で閉めようとしている

(2004.8.4. AM6:52:00)



【画像5-5】

まだ戸が完全に閉まっていない

(2004.8.4. AM6:52:01)



【画像5-6】

体の向きを進行方向に変えている

(2004.8.4. AM6:52:02)



【画像5-7】

取っ手に手をかけようとして失敗した場面

(2004.8.4. AM6:52:03)



【画像5-8】

体の向きを進行方向に変えた

(2004.8.4 AM6:52:03)



【画像5-9】

最後まで閉めようとしている

(2004.8.4. AM6:52:04)



【画像5-10】

最後まで閉め終わった

(2004.8.4. AM6:52:05)



【画像5-11】

(2004.8.4 AM6:52:06)

3-3③ 落ち着いて戸を閉める場面（撮影者はAの位置に立つ）

画像6-3～6-8では、落ち着いた動作で戸を閉める様子が確認できる。この時撮影者はAの位置（図1参照）に立っている。画像5-7のような失敗の場面は観察されなかった。



【画像6-1】

入る時は閉まっていた。
自分で開け、閉めずに中
に入り、用事を済ませて
出てくる。出たら閉め
る。

(2004.8.4. AM6:35:22)



【画像6-2】

(2004.8.4. AM6:35:23)



【画像6-3】

出て来るところ

(2004.8.4 AM6:35:45)



【画像6-4】

(2004.8.4. AM6:35:47)



【画像6-5】

(2004.8.4. AM6:35:49)



【画像6-6】

(2004.8.4. AM6:35:50)



【画像6-7】

(2004.8.4. AM6:35:51)



【画像6-8】

(2004.8.4. AM6:35:53)

3-3④ 開け放したままにする場面



【画像7-1】

もともと開いている戸に入っていく場面。閉めずにそのまま入っていく。出るときも開けっ放し。中に人がいる。

(2004.8.4. AM7:32:54)



【画像7-2】

(2004.8.4 AM7:32:55)



【画像 7 - 3】
(2004.8.4 AM7:32:56)



【画像 7 - 4】
(2004.8.4 AM7:33:00)



【画像 7 - 5】
(2004.8.4 AM7:34:09)



【画像 7 - 6】
(2004.8.4 AM7:34:11)



【画像 7 - 7】

(2004.8.4 AM7:34:13)



【画像 7 - 8】

(2004.8.4 AM7:34:14)



【画像 7 - 9】

(2004.8.4 AM7:34:15)

3-3⑤ 開け放したままにしようとしたが結局閉めてもらうことにした場面



【画像 8 - 1】

閉まっている戸を自分で開けて入り、開けっ放しで出ようとする。「閉めましようか」と尋ねたら「閉めて」と頼まれた。この時撮影者は鈴木さんに焦点をあてて撮影しており、ベッドは写していない。

(2004.8.4. AM7:03:42)



【画像 8 - 2】

(2004.8.4. AM7:03:43)



【画像 8 - 3】

(2004.8.4. AM7:03:44)



【画像 8 - 4】

(2004.8.4. AM7:03:46)



【画像 8 - 5】

出て行くところ

(2004.8.4 AM7:05:00)



【画像 8 - 6】

(2004.8.4 AM7:05:02)



【画像 8 - 7】

「閉めましょうか？」と尋ねられて考えているところ

(2004.8.4 AM7:05:03)



【画像 8 - 8】

「閉めておいてください」と返答するところ
(2004.8.4 AM7:05:04)



【画像 8 - 9】

(2004.8.4 AM7:05:06)



【画像 8 - 10】

(2004.8.4 AM7:05:07)

4. 考察、まとめ

ここで、ジンメルの著書『橋と扉』から、扉についての記述や、扉との比較で登場する橋と窓それぞれについての記述を引用し、それを説明していきたい。そして、それがどのような形で鈴木さんの場合に表れているのか考察していこうと思う。

橋の場合には分割状態と結合状態の両要素が、前者はどちらかといえば自然の側に、後者はどちらかといえば人間の側に属するものとみなされるというかたちで落ち合っているとすれば、扉の場合には両要素はもっと釣り合いのとれたかたちで人間の作業のなかへ、人間の作業として合流する。ここに橋に対する扉のいっそうゆたかな、い

っそう生き生きとした意義があるのであって、それは、橋の場合にはどちらの方向にむかって渡るかということによって意味の相違は出てこないのに、扉の場合には出ると入るとでは意図のうえでまったく異なるという点に注目すれば、ただちに明らかとなる。(Simmel,1909:39)

人間が橋を架けようとするものの前提条件として、その 2 地点間が分割されているという目に見える事実が必要である。分割されている 2 地点間を、繋げて 1 本の通り道にしたいという希望があるからこそ人は橋をかけるのだ。もしその 2 地点間が元来繋がっているのなら、その区間に橋を架けようという発想自体起こりようがない。このことは、橋を架けるといふ行為や、架かった橋を見ることで周りの人間の目に明らかとなる。橋を架けている人を見ることで、私たちは、両岸が分け隔てられているということをその人が認識していることに気づくし、その分割された両岸を 1 つに結合したいという意思を持っていることにも気づく。また、すでに架けられた橋を見ることによって、元々は分割されていた 2 地点間の存在が顕在化するし、過去にそこを一続きの状態に結合することを望んでいた人がいたことも明らかとなる。

ところで、結び付けるべき両岸というのは自然が長い年月をかけて作りあげてきたもので、分割状態は自然の支配下にあると言える。一方橋は、人間が作りだしたものなので、結合状態を作り上げるための要素となる橋は人間の支配下にあると言えるだろう。それに対して扉を考える上での結合状態というのは、連続しただだっ広い空間を指すと考えられるが、扉が開いた状態では部屋は連続性を保っているもので、まさに結合状態が作り出された状況だと言える。この状態を生み出すために扉を開くのは人間であるので、結合状態は人間の支配下にある。一方分割状態というのは、ただっ広い空間が扉によって仕切られた状態をいうと考えられるが、この状態を生み出すために扉を閉めるのは人間であるので、分割状態も人間の支配下にあると言える。

橋の場合は、分割された A 地点から B 地点への移動と、B 地点から A 地点への移動は意味の上で違いはない。つまり、どちらの場合も橋を渡るという行為によって分割されている 2 地点間を結合させているに過ぎない。始点と終点が入れ替わっているだけで、両者とも、分割された地点間を結び付ける行為だという点で変わりはない。

それに対して扉は、開けるのと閉めるのとでは意味が大きく異なる。開けるのは結合状態を作り出す行為であるのに対して、閉めるのは分割状態を生み出す行為であるからだ。扉を開けると、そこには連続性のある広い空間が生まれる。これが結合状態である。扉によって仕切られ得る細々とした空間を結合し、1 つの大きな空間をつくりあげる行為である。その細々とした空間を、扉によって仕切ると、分割状態が生まれる。仕切ることにより、それまでは全体としてひとまとまりだった空間が、新しく出来た小さな空間ごとにそれぞれの秩序を持った組織が存在するようになる。人々は、結合状態をつくり出そうという意図の下で扉を開き、分割状態をつくり出そうという意図の下で扉を閉めるのだ。壁は動か

することができないが、扉を前にすれば人は開くか閉じるかの選択をすることができる。扉は、開くことも閉じることも出来るという点で大きな可能性を秘めた道具だと言える。先程の続きをさらに引用する。

このことは、扉の意味と窓のそれとのあいだに明確な一線を画する点でもある。たしかに窓は、屋内を外界と結合するものとして、その他の点では扉と似ている。しかし窓にたいする目的論的感情はほとんど一方的に内から外への方向をとっている。窓は外を見るためのもので、内を覗くためのものではない。なるほど窓はその透明さによって内部と外部との結合をいわば慢性的に、連続的に成立させている。しかしこの結合が一面的な方向しかたどらず、また、窓が目のための通路でしかないという点に限定されているところから、窓には扉のもつ深い原理的な意義のほんの一部が分け与えられているにすぎない。(Simmel,1909:40)

窓は、内の世界と外の世界を分ける境目としての役目を担っており、内へ入ると外へ出るのでは意味が違う。このことから、窓は橋より扉に近い性質を持っていると言える。内へ入る行為は結合状態から分割状態への方向を示し、外へ出る行為はその逆で、分割状態から結合状態への方向を示す。しかし、窓は部屋の内側から外側を見るための道具としての役割しか与えられていない。[覗き行為はここでは考慮されていない。] しかも、窓から体ごと外に出ることは想定されておらず、あくまで視覚による結合が期待されている。また、窓には扉とは違って透明なガラスがはまっているので常に視覚による内から外への結合がなされていることになる。窓は内から外への一方通行の結合しか許されておらず、しかもそれは視覚によるものに限られているので、扉とはまた違った性質を有する道具だと言える。

さて、鈴木さんについて考えてみる。彼女の場合は戸を閉める場面も、閉めない場面も観察できた。また、閉めるにしても精神的に余裕をもって閉める場面と精神的に緊迫した状態で閉める場面の2パターンを観察することができた。

まず、閉めるか閉めないかの判断だが、これは空間を結合させておくか、分割するかの判断であるという解釈が可能だ。閉めるという判断は連続した空間を分割しようという意思のもとでなされる。そして、その行為を見ることを通じて第三者は、その人が空間を分割しようという意思をもって行動したのだということに気づくことができるのである。また、閉めないという判断は、連続した空間をそのままの形で保持しようという意思のもとでなされる。そしてその行為を見ることによって第三者は、その人が空間を結合させたままにしようとしていることを知るのである。

画像5-1~5-11、画像6-1~6-7、画像7-1~7-9はいずれも、部屋に入るときと出るときの戸の状態を同じにしているという点で共通している。例えば画像5-1~5-11と画像6-1~6-7では、もともと閉まっていた戸を自分で開けて部屋

に入り、出る時は閉めている。画像7-1～7-9はその逆で、もともと開いている戸から中に入り、出る時は閉めずに開けっ放しで通り過ぎる。これは中に人がいる時も、いない時も観察できた。開いている戸は開けたままにしておき、閉まっていた戸は閉めてから立ち去る、という習慣があるらしいことがこれらのデータから分かる。そして、そのことを第三者の撮影者も相互行為の中で感じ取っていることが画像データ8-1～8-10で観察できる。もともと閉まっている戸を開けて入ったのだから、出るときは閉めるはずだ、と撮影者は想定していたのだが、鈴木さんが開けっ放しで通り過ぎようとしたので(画像8-6)撮影者は「閉めましょうか」と尋ねたのである。鈴木さんには、戸を初めの状態に戻すという習慣もあるが、開けっ放しにするという習慣もあるようである。

さらに、精神的に余裕を持って閉める時と、緊迫した状態で閉める時があった。両者は、連続した空間を分割する行為という点で変わりはないのだが、分割するという行為に含まれる意味の違いがあると考えられる。扉は開けることも閉めることも可能な道具である。そして、開ける行為にも閉める行為にも、様々な目的が伴っている。さらに、その目的は相互行為を通して第三者に分かる形で示される。橋の場合にはそもそもどちらの方向に進むのも意味の上では同じであるし、窓の場合は内から外への方向が限定されており、視覚による結合しか出来ないことになっているので、扉の場合の、分割する行為に含まれる意味の違いというような複雑さは生じない。鈴木さんの事例にはジンメルの述べた扉の概念が当てはまっていると言える。

参考文献

Simmel, Georg, 1909, “*Brücke und Tür*”, 掲載誌不詳, 頁不詳=1976, 酒田健一訳「橋と扉」, 酒田健一: 熊沢義宣・杉野正・居安正, 『橋と扉』(ジンメル著作集 12 巻), 白水社: 頁不明。→1998 『橋と扉 (新装復刊)』, 35-42。

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊（国立国会図書館等所蔵）

- 1 エスノメソドロジーとその周辺
ー平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー 1998年3月発行
- 2 ラジオスタジオの相互行為分析
ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー 1998年10月発行
- 3 エスノメソドロジーと福祉・医療・性
ー平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー 1999年2月発行
- 4 障害者スポーツにおける相互行為分析
ー平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版)ー 2000年2月発行
- 5 日常生活の諸相
ー平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー 2000年2月発行
- 6 現代社会の探究
ー平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー 2001年2月発行
- 7 インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) 2003年2月発行
- 8 インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) 2003年9月発行
- 9 社会学の窓ードラマティックな日常生活ー
ー平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー 2004年2月発行

義肢・装具のエスノメソドロジー

発行日 2005年2月14日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088) 656-9308 E-mail:Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成16年度徳島大学総合科学部榎田地域調査実習報告書発行プロジェクト
